



上ノ山ブナ林
落ち葉の上をゴロゴロ
(高柳小学校生)

水無月

二十九、三十日、当工房の旅行。先ず、久々に八尾和紙の吉田泰樹さんの工房を訪ねる。泰樹さん夫妻と当工房の仙三君は、昔、芹澤銈介氏の弟子で型染をやっていた。きれいに整頓された工房での仕事、糊付け作業などを案内していただいた。以前、狐の夜祭りや高柳にお出でいただいた時は、風の盆歌の踊りにも駆付けつけて下さったこともある。

飛騨の合掌作りのホテルに入ると、娘の翠(みどり)が女の子を無事出産したと連絡が入る。名前も決めてあって「碧咲(みさき)」と名付けたという。翠(すい)か碧(へき)、青色につなげたみたいだ。いよいよ俺も爺さんになった。

ホテルの売店で、青色のさるぼぼを買求めた。世間では子供より孫は、かわいいとよく言われているが実感である。いずれ来てうれし、帰ってうれし、両方うれしい頃がやってくるのだらう。



稲刈りと稲背負い。子どもの頃、学校から帰るといつも稲背負いが待っていた(新渡戸文化小学校生)

文月

六、七日と地元高柳小学校の五、六年生、十一名が大地の学校体験でやってきた。自分と同級生の中村と、上屋宮の幅のおじいさん、四人がガイドの練習。先ずコメ物語体験。今も食べている米、百年前の人はどうしていたかを知って、少しでも昔の人の難儀や工夫をつないでこの頃と今とを分かち合えたらいい。千歯は、大昔はウツギの枝などを使ったらしいが、江戸時代には鉄製の矢になっている。十数本が櫛のようになっており、櫛の穂を入れて引つ張るとバラバラと穀が落ちる。また、穀すりは木の丸太に穴をあけ、断面をギザギザに彫って、くるくる回すと穀が挿られて皮が剥け玄米になる。道具は博物館で見つけたものを友

高柳の生活

第48号
2017年10月16日 発行
小林康生
〒945-1513 新潟県柏崎市高柳町門出
☎0257(41)2361 ☎0257(41)3024
e-mail info@kadoidewashi.com
http://www.kadoidewashi.com
年4回発行 年会費920円

近年、塩に縁があつて、今回もお土産は塩である。

人の木こり(村田幸多朗)からチェーンソーで穴をあけ再現してもらったもの。その後、藤箕で仰ぎながら軽い穀を吹き飛ばして、重い玄米のみにするのだが素人には難しい。ただ、五感を豊かにする学校なので、上屋さんからじっくり指導してもらった。その仕事を合理的にしたのが中国より伝わった唐箕だ。箱の上から少しずつ穀を落とし、板羽を回転させ風を送り、軽いのみ殻は遠くに飛び、重いものは真下に落ちることを選別する。これは小さい頃、大豆や小豆にも使っていてやらせられた。この道具も手製で作った。米搗きは、小さい餅つきの臼の中に玄米を入れ、軽い杵でひたすら打つ。米が削れて糠は下部にたまってくる。二升の米を自分が一時間続けても八分つき、昔の人が白い米を食べるといふことはとても高級であることが分かる。当地のことわざに「越後から米搗きに」と言われているのは酒造りで、吟醸酒にするため、冬の出稼ぎの仕事だったようだ

どんなにやっても、粃米が混ざるので昔の人は、時々は粃米も食べていたはずだ。ここでは勿体ないが、強い塩水(三十八%)を超えると塩は解けず下部に残る。それで浮いてきた粃米を金魚すくいのようにして取り除く。

二年前、イスラエルの死海で泳いだ時、塩分二十五%、下部はザラザラな塩の結晶で素足だと痛かった。また、一ヶ月前、フランス大西洋のグランディエの塩田は、潮の満ち引きを利用して、一枚目の塩田で濃度の高い水を、次の塩田に送り、三枚目の塩田では濃度が高くなると塩となって結晶が下部に溜まりそれを集めていた。日本のように煮つめることはしていなかった。沖縄の屋我地島では入浜式で原理は似ているが最後は煮沸していた。



どちらもトウミ。目的も一緒だが、左は藤箕、右は唐箕。(高柳小学校生)



袋に炊き飯のとき、鍋の中味は、ライスと非常食(新渡戸文化小学校生)

この国でも普遍的な感動を覚える要素が宿っているからだ。

紙の定義は繊維を濾す(漉く)ことになっており、一番古いのが、二二〇〇年前からの歴史。叩いて延ばす、乾けば繊維同士が勝手にくっついてくれるから紙のようになってくれる。

この方が子供には紙の原理がわかりやすいのと素材感がそのまま、もろに現れて土偶のようないつの時代でもどこの国でも普遍的な感動を覚える要素が宿っているからだ。

今のところ、はがき大くらいの大きさにして体感してもらっている。その叩き台の石は、白御影石で旧新潟県庁の外壁に使われていた。取り壊されるとき、高柳町が少しもらってきてそれをかやぶきの宿の敷き石に使っていたが、雪が降るとツルツルして転ぶ人がいたものだから取り外して、しばらく厄介物になっていた代物だ。それを野外テーブル兼原始の紙づくり台として甦らしたものだ。



薪割りと釜風呂

薪割りは、金矢を叩いて割る。ノコギリ以前の板も同じ方法。美濃市から運んだ紙煮釜の風呂。(高柳小学校生)

いつも、上野山の楮畑の上に広がるブナ林でターザンロープや空中ブランコは、子供だけではなく大人も子供にかえる遊び場。毎年、門出かやぶきの里を訪れる百人を超えるイスラエル人たちにとっても必ず行く場所だ。今回は少し教育も意識して「暮らしと木々たち」という自分の幼いころから経験した使い方や遊び方、また昔の人から聞いたその木の特徴など三十種類ほどまとめ、小林康生の主観的ガイド集として、出発前から椿や笹の葉で草笛をつくったり、エゴの実を潰して水でかき混ぜると泡が立つので、石けんの木と呼んでいて、それを川の上流から流すと魚が浮いてくるとか。クモジは香りもいいが、草木染で煮ていると頭がクラクラするくらい強烈な匂い。この木は昔、養命酒用に出荷する農家もいたとか。...

「大地の学校」の本開校に向けてのアピールとして活用するつもりです。その後、八月末から三泊四日で訪れて下さった東京の新渡戸文化小学校の子供たちも大地の学校体験の試行も含めて協力していただいた、「コメ物語」では、稲刈り、稲背負い、稲架掛け、餅つき、ちまき作りなどなど...

今回は紙面の都合上、詳細は次回にお伝えしたいと思います。十月八日は「狐の夜祭り」。しばらくはいつも通りのバタバタが続くようです。

「あとがき」

九月二十九日、恩師、柳橋眞先生の三回忌。弟の純さんからもお声をかけていただいて、水戸市でお墓参り。これからいつ会えるか、一期一会の年代に入ったこともあり、二〇名くらいの方が全国から集まった。みんな少しづつ年を取ったが、かつての柳橋学校の同志たち、顔を見るとホッとします。益々、先が揺れ動いて見えない時代。過去、現在、未来が分断されていくよう落ちて着かない。人も自然も時代もどこかで分かち合っていたいと祈るばかり。自分も年を取った証拠であるうか。じっくり、地に足をつけて現在を眺めたい。